東日本大震災後の小説と人新世における「ゴミ」、「動物」、そして「人間」――木村友佑『野良ビトたちの燃え上がる肖像』を中心に

芳賀浩一

キーワード：東日本大震災、小説、人新世、ゴミの思想、『野良ビトたちの燃え上がる肖像』

はじめに

本稿は東日本大震災後の小説における「ゴミ」の存在に注目し、その認識の違いがいかに現代の文化・思想的なテーマとなり得るかを考察するものである。特に近年英語圏の環境思想の中で最も注目を集めるテーマとなっている「人新世（アンスロポセン）」の議論を枠組みとすることでグローバルな環境問題の重要な要素である「ゴミ」と現代の文化的表現がいかに交差し問題を提起しているかについて、東日本大震災をテーマにした文学作品とその延長上に書かれたと考えられる木村友祐『野良ビトたちの燃え上がる肖像』（2016年）を取り上げて論じる。

東日本大震災は地震と津波による一次的な災害、原子力発電所の電源喪失による原子炉のメルトダウンと放射性物質の拡散事故という二次的災害、そして風評やいじめなどによる三次的な災害／人災を生んだ。天災と人災が複雑に交差し「フクシマ」の物や人に放射能汚染という近代技術の負のイメージが付与される事態を生んだ。一方、「人新世」の概念においては、人間が自然環境を大きく変え、他の動植物ばかりか自らの生存圏をも破壊してしまう存在として認識され、人間は自然を克服する存在から共生を求めて持続可能な関係を築く存在へと変化するべきであることが提唱されている。人新世における環境の問題は「人間」のアイデンティティーをめぐる問題でもあり、それは「人を描く」ことに価値を見いだす文化としての「文学」にも相応の変化を求めていると筆者は考えている。

ゴミは人間が廃棄あるいは排出することによって生まれるが、そのゴミにはプラスチックや二酸化炭素など人間にとっての地球環境を悪化される物質が含まれている。そして、環境を悪化させている「人間」には我々個人と科学技術をもった集合体としての人間社会が不可分に含まれる。ゴミと人間の関係を見直すことは、知らぬ間に環境を悪化させてきた「人間」個人と社会の在り方を再考し環境との関係を作り直すことであると考えられる。文学が表現するゴミはそうした「人間」を作り直す契機と動機を孕んでいる。

1. 人新世（アンスロポセン）

人新世（The Anthropocene、アンスロポセン）は、人間が地球環境を左右する存在となった時代という意味を表し、オゾン層の研究でノーベル賞を受賞したパウル・クルッツェンが2000年に提唱して以来、多くの研究者が賛否両論を展開する一大テーマとなった。その影響は地球物理の世界を越えて人文学の世界にも及んでいる。クルッツェンとストーマーは18世紀後半のジェームズ・ワットの蒸気機関の発明に端を発した産業革命を人新世の始まりと考え、情報社会化に基づく環境的に持続可能な人間社会の構築を訴えた[1]。クルッツェン等の提唱は、一方では人間の手によって地球環境を管理するというエコ・エンジニアリングの思想の台頭につながり、人新世の概念は人間には科学の力を用いて持続可能な地球環境を作る義務がある、といった文脈で語られることも多かった[2]。他方でクルッツェンとストーマーが提起した人新世の起源に関する考察は、多くの人文学系研究者にこの議論への参加を促すきっかけとなった。その後、人新世の起源としてはおよそ10500年前の農業革命、15世紀末から16世紀にかけてのコロンバスによる西洋人から見た新大陸発見と植民地化、そして1950年代の大規模な核実験競争、あるいは戦後の高度経済成長によるエネルギー消費と人口の急激な増加[3]、など様々な見方が論じられてきた。

人文学の中でも特に文学を含む文化や思想・哲学の分野では、歴史的起源とはまた別の角度から人新世についての考察が進められてきた。この分野で議論の起点となったのはチャクラバーティによる“Climate of History: Four Theses”（「歴史の思潮―4つの主題」2009年）である。彼はこの論考の中で、現代の気候変動が近代における（人間の）歴史と自然史の区分の根底を揺るがす現象であることを論じ、さらには「人新世」の概念が人文学と科学による主観と客観という近代的な分離を修正し、人文学が従来の人間観を大きく変えるきっかけとなることを示唆した。また気候変動にとっての問題が資本主義か社会主義かという社会システムではなく工業化（近代化）それ自体にあるという彼の指摘も見逃せないだろう。その後の論の多くは、自然と人間の二元論の失効には同意を示しつつも、クルッツェンらの主張に含まれる近代的発展史観とその延長上にある、科学の力が自然を凌駕するようになったという認識を批判的に捉えて人新世に代わる概念を提案している。よく知られているのは、ダナ・ハラウェイが提唱した「クトゥルー新世（Chutulucene）」、あるいはアンドレア・マルムやジェーソン・ムーアが主張する「資本新世（Capitalocene）」などである。「クトゥルー新世」は、来るべき未来の姿をマルチ・スピーシーズ（人間を含む多様な種）の混交と共生の時代とする概念であり、「資本新世」は、近代人が作った資本主義の経済システム

1
P.J. Crutzen and E.F. Stoemer, “The ‘Anthropocene’,” IGBP Global Change Newsletter 41 (2000): pp. 17–18.

2
ジオエンジニアリングによる気候変動への対応は様々な形で模索されている。その一例として“Geoengineering the Climate: Science, Governance and Uncertainty”を挙げておく。https://royalsociety.org/topics-policy/publications/2009/geoengineering-climate/ September, 01, 2009.

3
Simon L. Lewis and Mark A. Maslin, *The Human Planet: How We Created the Anthropocene* (London: Pelican Books, 2018), pp. 225–265.

こそが環境問題の元凶であることを主張して人新世の概念を批判するものである[4]。

このように「人新世」の概念は多くの批判に晒され、地学的な区分としては疑問視されるようになってきているにもかかわらず、なお多くの研究者を惹きつけている。その理由は、この概念が「人間」を地学的・環境的な力として認識することを提唱し、近代に成立した文系・理系の分離、あるいは人間中心的な「歴史」観を修正する必要性を象徴しているからだと考えられる。さらに人新世の議論は、地球環境を科学と資本の連携によって解決するべきエコモダニズムの課題とするか、あるいは人間と非人間の関係を再構築し近代的な発展史観とは異なるエコ・ポストヒューマニズムの思想によって解決の道をさぐるか、をめぐっての古くて新しい論争の場となっていることも重要である。人新世の認識は、人間が肉眼では捉えることのできない微生物やウィルス、あるいは地球の気候や地殻変動と相互に作用し合いながら生きていることの発見によってもたらされ、必然的に科学や科学を生んだ社会を介して理解される他ない人間とその環境をいかに文化や思想が表現するかを問うているのである。

4
Donna Haraway, *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene* (Durham, NC: Duke University Press, 2016); Jason W. Moore, ed. *Anthropocene or Capitalocene?: Nature, History, and the Crisis of Capitalism* (Oakland, CA: PM Press, 2016); Andreas Malm, *The Progress of This Storm: Nature and Society in a Warming World* (London: Verso, 2018).

2. ゴミの思想

人新世の時代におけるゴミ問題は、単なる物質的な廃棄ではなく、人間と物質の相互作用的な循環の一部としてゴミを捉えることを求めている。ゴミに関する先駆的な研究を行った人類学者メアリ・ダグラスは二項対立的な排除と秩序の構図を用いて廃棄物（汚物）を考察したが、社会学者のジグムント・バウマンは『廃棄された命』（*Wasted Lives*, 2004）において近代資本主義社会が、近代化された地域と近代化しつつある地域の格差によって発展し、その際に常に使い捨てられる人間たち（人間のゴミ）が存在することを指摘した[5]。現代の環境危機は、物質的な廃棄物を不可視化することが不可能になり地球がゴミで溢れ始めただけではなく、人間を使い捨てる行為もまた社会的に限界を迎えつつあることを示している。廃棄物（ゴミ）とは、物質の問題であると同時に人間の問題であり、それは逐語的なゴミと比喩的なゴミの境界と相互浸透性を再考し再編することを要請していると考えられ、そこに「文化」が介在してくることになる。

廃棄物（ゴミ）は物質に対して人為的に付与された負の属性である。人はある「物」に自分にとっての使用価値や美的価値がないという判断をし、廃棄することによって「物」から多くの属性をはぎ取り、その結果として生まれるゴミは人間の認識において多くの属性を失った単なる物質、に近い存在と

5
Zygmunt Bauman, *Wasted Lives*: *Modernity and its Outcasts* (Cambridge, UK: Polity, 2004), p. 6.

なる。ゴミは近代社会の生産―消費活動を経た結果、人間が消費する以前の人間にとっての価値（資源性）を失っているため、「物そのもの」として他の物質との共通性を回復しており、近代以前であればただ「自然に還る」はずだった物である。この点において廃棄物（ゴミ）には人間中心主義を批判するエコクリティシズム（環境批評）が焦点化している価値判断の分かれ目が存在する。まず、非人間を考慮に入れれば、「価値がない」物などほとんど存在しない。そして廃棄物は、人間の間の社会的な違いを越えて排出され、さらに人間と非人間をつなげる共通項として存在する物質ともなり得るのだ。ステーシー・アライモが唱える「trans-corporeality」（超身体性）という概念は、人間と他の存在との共通項として身体・物質をとらえるものであるが、廃棄物もまた、人間とその外部の関係を再考する鍵となる物質である[6]。

廃棄するという行為は、人間が必要としなくなった物質を外部に還し環境を構成することと言えるが、廃棄する物質の中には、プラスチックのようにうまく分解・循環され環境の中に再編されることなく、環境に影響を与えてしまう物が現れる。ティモシー・モートンは気候変動や核廃棄物を「ハイパー・オブジェクト」と呼び、人間が作った問題と解決可能性の間のギャップとして物質的であると同時に認識論的な課題であると考えた。ゴミの問題についてモートンの指摘の重要な点は、気候変動や放射能というハイパー・オブジェクトは、向こう側とこちら側を分けることによって汚れた廃棄物と清潔な自分自身を保つという、近代の二元論的な世界観が既に失効し外部という意味での「自然」が現実には存在し得ないことを改めて認識させたことである。

モートンの考えを敷衍すると、我々は既に放射能や気候変動と共存しており、廃棄したはずのゴミと共に生きていることになるが、そうした事態を認識することは、我々自身が「不気味な存在」であることを認めることでもあるため、こうした問題の解決へ向けては物質的、環境的であると同時に美学的な問題にも取り組む必要がある。

ここでエコクリティシズム（環境批評）にとって浮かび上がる課題のひとつは、自然と文化の二分法が認識的に機能しなくなり、物質も人間も「向こう側」へ廃棄することが困難になったハイパー・オブジェクトの時代において、いかに循環と共生の関係を作り上げるか、ということである。そこで注目されるのが、生産―消費という近代社会の二元的な軸から見落とされてきた分解・再生というプロセスの見直しであり、そうした観点から、「文学と持続可能性」というテーマが浮かび上がってくるのである。

科学としての環境問題に対して文学の役割を考える手がかりとしては、クレア・コールブルーク（Clare Colebrook）が「数学的あるいは論理的形象が時間を越えて変わらない主体性と真理一般によるものであるとすると、文学はある明白な違いを維持する」と述べているのが示唆的である（121）[7]。この

6
Stacy Alaimo, *Exposed: Environmental Politics and Pleasures in Posthuman Times*（Minneapolis: University of Minnesota Press, 2016）, p. 134.

7
Clare Colebrook, “The twilight of the Anthropocene: sustaining literature,” in *Literature and Sustainability: Concept, Text, and Culture*, edited by Adeline Johns-Putra, John Parham, and Louise Squire（Manchester, UK: Manchester University Press）, pp. 115–136.

「明白な違い」とはすなわち、時間を越えて変化する（人間を含む）物質の可変性と複雑さである。こうした文学的行為によって、生産―消費から排除された廃棄物としてのゴミを読み替え、排除を受容に変換することによって、持続可能性を指し示す循環を文学的な創造によって生み出すことが、環境的にも文化的にも求められているのではないだろうか。持続可能な環境が目指す脱炭素社会は、人間も物質も使い捨てられる（wasted）ことなく生き残る「文化」とともに創造（想像）されるのではないだろうか。

3. 東日本大震災後の小説におけるゴミ

東日本大震災は発災の約2か月後から7年余りの間に数多くのポスト3.11小説を生んだ[8]。津波によって生じた大量のガレキ（瓦礫）や福島の原発事故による放射能汚染は震災後の日本にとって大きな関心事であったが、震災後の文学作品でそうした「ゴミ」の問題を描いたものは少ない。本稿で言及するのはむしろ例外的にガレキ・ゴミに目を向けた作品ということになる。震災直後の被災地においてガレキは復旧の妨げとなる大きな問題であった。そのため、震災直後の被災地の人びとを取材した真山仁『そして、星の輝く夜がくる』（2014年）や自身が被災地に移住した体験を元に陸前高田という場を書いた瀬尾夏美『あわいゆくころ―陸前高田、震災後を生きる』（2019年）においてガレキは「排除すべき異物」として描かれている。その一方で天童荒太の『ムーンライト・ダイバー』（2016年）は、海中に沈んだガレキの中から震災で亡くなった人びとの遺品を探索するダイバーを主人公にし、ガレキが震災遺物でもあり、それが亡くなった家族の記憶を呼び起こす貴重な品であることに焦点を当てている。こうした正反対のようにも見えるガレキの在り方は実際の被災地の人びとの経験を記したノンフィクションの作品にも見られるものである[9]。他方、数少ないながら作者の内面や問題意識を反映したガレキの表象もある。

辺見庸の詩「わたしはあなたの左の小指をさがしている」（2011年）では「瓦礫の原をわたしはすすんでいる」と語り手がガレキの中で誰かの左の小指をさがしていることが示され、ガレキは震災によって帰属（愛や記憶・価値）を失ったモノ＝「無」と表現される。物質と人間の間の所有や愛着といった複数のつながりが断ち切れた時に「モノ」が現れ、この「モノ」は人間の排除によって生み出される「ゴミ」とも異なり、人間が作った物と人間の関係が切れた様相の断面を曝け出す存在である。

また被災地を取材していないことを公表して話題となった北条裕子『美しい顔』（2019年）は「非日常としてのガレキ」を「誰が撮ったって、ある程度、

8
筆者は『ポスト3.11小説論―遅い暴力に抗する人新世の思想』（水声社、2018年）において2011年から2017年までに出版された東日本大震災をテーマとする小説を収集・整理している。

9
ノンフィクション作品としては丸山祐介『ガレキ』（2012年）、葉上太郎『瓦礫にあらず―石巻「津波拾得物」の物語』（2013年）などが挙げられる。

涙ものの写真が撮れる」感動ポルノ的存在として「日常」を描く芸術に対置させた（13–14）。一方、玄侑宗久の『光の山』（2013年）は放射能に汚染されたガレキを自宅の庭に受け入れる老人の姿をとおして「否定的存在の肯定」を描き、非常時という時空間を日常化する行為を表現した。また原発事故によって資源としての市場価値を失い見捨てられた牛たちを飼育することの意義を問うた木村友佑『聖地Cs』（2014年）、さらに未来の日本で放射能汚染地域に出没するゾンビを描き、汚染地域をゴミ捨て場と考えるか、あるいは日本全体の再生の場とするかの葛藤をテーマとした恩田陸『錆びた太陽』（2017年）のような作品もある。

このように少ないながらも様々な角度からガレキ・ゴミを扱った震災後の作品がある中で、筆者の知る限り最も「人新世」の議論に呼応した「循環するゴミ」と文学表象の相互作用を描いたのがルース・オゼキの『ある時の物語』（*For A Time Being,* 2013, 邦訳2014年）である。オゼキは初期の代表作である『イヤー・オブ・ミート』（*My Year of Meats,* 1998, 邦訳1999年）でも日米にまたがる牛肉の消費をテーマとし、環境問題と社会、そして文学を関係づけることに独自性を発揮してきた作家である。『ある時の物語』では、小説の主要な語り手・視点人物であるジェーンが太平洋循環のゴミベルトを逸れてカナダの海岸に漂着したフリーザーバッグを拾い上げることが全ての発端となる。ジェーンはそのフリーザーバッグの中に日本人少女が書いた日記と旧日本軍の特攻隊員の遺書を発見し、それらを読み解く行為から震災以前の過去と「現在」を超える未来、そして太平洋の向こう側にある日本へと文学的想像を拡げることになる。この小説は「ゴミ」を再生する行為が外国語を翻訳する行為につながり、ひいては文学的想像の源泉ともなり得ることを巧みに表現している。

以上の作品は直接的に東日本大震災に言及したものであるが、「震災後」の日本がオリンピックを目玉にインバウンドによる経済成長と震災からの「復興」を推し進める中で、「ゴミ」に着目しながら日本社会における「人間」概念の変化を描いた作品に木村友佑の『野良ビトたちの燃え上がる肖像』（2016年）がある。この小説は木村が震災直後の福島を取材して得た動物と人間というテーマを別の文脈に接続し発展させた作品であり、オゼキの『ある時の物語』とは異なる角度と視野で人間とゴミ、そして動物をめぐる言葉と物質の範列的な関係を捉え、現代日本の文学作品における環境意識を考察するうえで有意義な作品となっている。

4.『野良ビトたちの燃え上がる肖像』

『野良ビトたちの燃え上がる肖像』は『新潮』2016年8月号に掲載され同年11月に新潮社より単行本として出版された。この小説は、周囲から「柳さん」と呼ばれ、多摩川ならぬ「弧間川」の河川敷に小屋を建てて暮らす63歳の男の視点でホームレスのコミュニティーに起こった異変を描いている。ホームレスという格差社会の象徴的存在に焦点をあてている点では、落ちぶれた郷里の幼馴染との邂逅を描いた「埋み火」(2012年)との関連や、また柳がかつて鉄塔という高所で働く塗装職人であったという点では、ビルの窓拭きの心情を描いて近年話題となった「天空の絵描きたち」(初出2012年)とのつながりも指摘できる。しかし最も関連が深いのは、震災後の日本における排外主義の台頭を背景に正社員としての職を失った男をとおして猫と人間の共生というモチーフを描いた「猫の香箱を死守する党」(2013年)であろう。リアリズムを重視する木村としては珍しく「猫の香箱を死守する党」は作品発表の2013年からおよそ2年後を舞台としており、同様に『野良ビトたちの燃え上がる肖像』も作品発表の2016年から2年後以降の2018年−2020年という「近未来」を舞台にしている。「猫の香箱を死守する党」が震災を経て保守政権が復帰した後、排外的な思想を抱く若者が台頭した日本社会の閉塞感を表現する一方、『野良ビトたちの燃え上がる肖像』は東京オリンピックへ向かう日本社会が一層ネオリベラル化することによって抑圧される社会的弱者の姿を描く。どちらも東日本大震災後の日本社会における格差の拡大を捉えるディストピア小説であるが、異なるのは『野良ビトたちの燃え上がる肖像』において「近未来」を描くことで顕在化する作家の「想像力」が、新型コロナウィルス(COVID-19)の流行によってその解釈に大きな曲折を強いられたことである。そのことは本稿の最後に改めて触れることにする。

『野良ビトたちの燃え上がる肖像』では導入部において柳の目をとおしてオリンピック(作中では「東京世界スポーツ祭典」と表現される)を間近に控えた東京の周縁にホームレスが増加していることや、柳の生活の糧である空き缶のアルミの値段が下落し、空き缶の量も目に見えて減っている状況が語られ、読者にホームレスの人びとに訪れるに違いない大きな変化を予感させる。この変化の最初の具体的な現れと言えるのが、地区のゴミ捨て場に新たに設置された看板に書かれた次の言葉である。

「野良ビト(ホームレス)に缶を与えないでください。　菱上町会」(48)

ここで初めて弧間川流域に暮らすホームレスの人びとが「野良ビト」と名付けられる。明らかに「動物にエサを与えないでください」という常套句の言い換えである看板によって、柳たちは「野良イヌ」や「野良ネコ」といった

「動物」と同列に位置付けられ、ホームレスという和製英語の意味は単に家を失ってしまった人から、人間社会の周縁に生息する動物たちの同類としての「ヒト」へと変化し、その背後にある社会と一般住人たちの意志が前景化する。実は前述した「猫の香箱を死守する党」においては「野良猫に餌をやらないでください。糞尿に迷惑しています」という看板が描かれている（174）。この場合の看板は猫を遠ざけるためのものであるが『野良ビトたちの燃え上がる肖像』ではそれが人間を遠ざけるための言葉へと意味を拡張させたと言える。

このような特定の人間の周縁化と動物化の背景には、タワーマンションやゲーテッドタウンといった都会の富裕層を象徴するインフラの登場にともない、一般住民によるホームレスへの差別意識が顕在化し、急速に広まったことがある。「おれらもう、人扱いされてねぇんだな」というホームレスの嘆きに彼らの支援者である川島は「あのマンションができてから、周りの町はあからさまに変わりましたね」と呼応する（106）。国が推し進めた大企業優先の政策による格差社会の進行と、東京オリンピックの言い換えである「東京世界スポーツ祭典」のための「再開発と美化運動」が以前は緩やかにつながっていた弧間川流域のホームレスと地域住民の間に強い差別意識を生じさせるようになったというのである。

ここでまず注目したいのは「人間」と「動物」の境界線の揺らぎである。「野良ビト」という言葉に象徴されるように、タワーマンションやゲーテッドタウンの出現による経済格差の視覚化と内在化が進んだ結果、「人間」というカテゴリーの中で周縁化された人々が「動物」のカテゴリーに押し込められるようになる。この現象自体はさほど珍しいことではない。人種差別の歴史において被差別者は頻繁にサルやイヌに結びつけられ、動物や非人間のイメージを付与されてきた。しかし、この小説における対立は、単なる社会的な格差と偏見に基づくものではない。その根底に人間と動物の境界をめぐる考え方の違いが存在する。柳や木下をはじめとするホームレスの人びとと動物は必ずしも排他的な関係にはなく、彼らは一様に動物に親近感を抱いており、動物たちこそがこの社会の歪みを和らげてくれる存在だと考えている。

> ･･･彼らにとっては、この自分たちがゴミにたかるカラスか野良猫くらいにしか思われていないということを柳さんは知っていた。しかし、ムスビと暮らすなかで、自分がムスビのような動物たちと同等であるとみなされることについては、とくに抵抗はないのだった。（46–7）

飼い猫のムスビとの間にへその緒が繋がっているような信頼関係を感じる柳は、「人も動物も、そうやって一緒にいられんだ。……食い物さえあれば」（82）と独り言ちる。

経済的な格差を反映した競争と差別化の意識によってある種の人間を動物と見做す風潮に対し、飼い猫を愛する柳や、海外産の動物の肉が安い値段で提供されることに「動物生」への軽視を感じ憤る木下は、明らかに動物たちの命の尊厳と社会的な価値を見直すべきだと考えている。ゆえに彼らは地域住民の間における差別意識の台頭にたじろぐ一方で、動物たちへの共感を募らせてもいるのである。この両者は人間と動物の関係の在り方について正反対の立場を主張しているようである[10]。

10
地域住民の中にも柳たちに同情的な人もおり、また新たにホームレスとなった人々の多くは積極的に地域との関係を壊してしまっている。分断はむしろ古い地域社会とホームレスの関係に対する新たなタワーマンションと「野良ビト」の関係にある（53–55）。

5. ゴミと人間

この「動物」をめぐる異なる関係意識を別の角度から映し出しているのが「ゴミ」の存在である。小説の主人公である柳は、主に家庭から資源ゴミとして出される空き缶を収集することによって生計を立てている。彼は缶を潰し、ゴミ置き場を整頓することで地域住民の反感を買うこともなく過ごしてきた。しかし、このような地域社会との関係が経済格差の広がりとともに断たれるようになる。

> 弁慶大杉駅　―　駅の向こう側は、鉄道を経営する会社がつくったと思われるタワーマンションや、オフィスビルやホテルなどの高い建物が林立するエリアになっていた。・・・この一帯は、可燃ごみばかりか資源ゴミも、収集車が来るギリギリまで路上にだされることのない（マンションの敷地内に保管されて手出しできない）不毛の地なのだった。（15–6）

こうした変化の延長上に「野良ビトに缶を与えないでください」という言葉が現れるようになる。この看板の文句の「缶」は「エサ」の意でもある。一般住民にとって元来「ゴミ」であるはずものに「食料」という価値が見出されることによって同じ人間の中に「動物」と「人間」の境界線が引かれるのである。ここには同じ物質がその存在価値を変容させることへの拒絶と潜在的な恐怖が垣間見える。一体何が「ゴミ」で何が「資源」なのか。『持たざる国の資源論』で一般に天然資源に乏しいと言われてきた日本における政策的資源観の変遷を分析した佐藤仁は、天然資源をめぐる問題の本質が「資源環境そのものが劣化・枯渇することではなく、自然の一部を資源と見なした瞬間に形成される人間と人間の間に生じるといえそうだ」と述べている（10）[11]。

11
佐藤仁『持たざる国の資源論』(2011年)。

何が有用（資源）で何が無用（ゴミ）であるかは、自然と資本の間で人為的に形成されるが、自然は常にそうした有用性以上の可能性を秘めている。小説の登場人物たちは、社会が奇しくも「資源ゴミ」と名付ける存在をめぐって異なる世界観を提示する。小説の中で捨てられていたミニチュアのクラ

シックカーを拾い上げた柳は「おれらには、ゴミはゴミじゃねえんだ。拾ったもんの行き先さえ、ちゃんとわかってればな」と語る(44)。一般に我々は物を捨てる際にそこで物との関係を断ち切るが、もしその先の循環の輪が見えていれば、それは「ゴミ」ではなくなる。物質は、たとえそれが焼却されようとも姿形を変え異なる物質として循環する。そのことへの気づきが「環境破壊」の認識につながっていることは言うまでもない。しかし「資源」という人間中心的な資本の論理に基づく価値観は、物質の変容の可能性の一部にのみ焦点を当て、残りの部分をゴミとして廃棄することを促す。化石燃料の使用に伴って放出される二酸化炭素と地球温暖化やマイクロプラスチックによる海洋汚染、さらには放射線廃棄物による環境汚染の問題はその端的な例であるが、人間が恣意的に引いた「用・無用の境界線」が必然的に「意図せざる結果」としての環境問題を生み出している。

木村友祐は、この作品以前から「資源」と「ゴミ」、そして「動物」の関係に関心を抱き描いてきた。2014年に発表された「聖地Cs」においては、福島の原発事故によって放射能に汚染された牛たちをめぐって「資源」と「瓦礫」の関係が次のように描かれている。

> どうせ殺される運命の牛だったんだからって言うひと、いますよね。畜産を守る立場のはずの農水省にいたひとでさえ、被爆した牛を『動く瓦礫だ』って言ったそうです」 ・・・「あのひとたちには結局そうだんでしょう。魚でも森でも鉱物でも、人間以外のものをなんでも『資源』って言うひとたちですから。」(『聖地Cs』75)

この作品の主人公である西野は、経済的な価値観によって利用価値がない、とされた被曝牛の排泄物・糞を視察に訪れた国会議員に差し出すことで不可視の放射能の存在を可視化してみせる。牧場の至る所にあり、強い粘着力で主人公の行動を妨げる牛たちの糞は、同様に草や木や牛に付着して牧場の至る所に存在するが目には見えないセシウムと対比的に描かれている。目に見えない放射線は、人々の不安を掻き立てるが、その放射線を含んだ草を食べた牛の糞は、そうした不安に無用な汚物としての形象を与える。不可視ながらも遍在している放射能は、日常的な秩序や衛生を保つために通常不可視化されている排泄物と重ね合わされ、その排泄物を国会議員の目の前に突き出すことによって西野は社会における用・無用の線引きを象徴的に批判する[12]。不可視化されて捨てられる存在としての排泄物は、ガレキと放射能と牛、そして人間をつなぐことで、人間中心的な「資源」という見方に異議を唱えている。

「無用」を示す人為的な境界線の向こうにある「ゴミ」は、同じ論理によって人間を表すメタファーとなる。佐藤は前述した本の中でかつて政策担当者

12
主人公の西野が結婚生活で夫に虐待を受け、東京から福島の牧場へボランティアとしてやってきた女性であることも重要な点である。会社で正社員として働く男性が受ける抑圧がより弱い立場にある女性への暴力となり、その暴力からの避難先として被曝牛が飼育される牧場が選ばれている。

の間にも人間を「人的資源」とみなすことには抵抗感があったことを記しているが（30）、『野良ビトたちの燃え上がる肖像』におけるホームレスの人びとは、タワーマンションの住人のような「人的資源」とは対称的な立場に位置づけられることによって「ゴミ」と見做されるのだ。小説の中で「東京世界スポーツ祭典」のための美化運動によって排除の対象となった弧間川流域のホームレスの人たちは、同じように排除の対象とされることへの恐怖にかられた暴徒によって火をつけられることになる。「あいつら全員、ガソリンかけて燃やしちまえばいいんだよ。生ゴミと一緒だもの」（122）という一般会社員の言葉には、ホームレスに「無用」というゴミのレッテルを貼ることによって自らの手前に用・無用の境界線を引き、自らの有用性を確認したいという焦燥感が現れている。さらに『野良ビトたちの燃え上がる肖像』の最終部において、作品の語り手であったことが明かされた木下は、柳をはじめとする登場人物たちが、暴徒による襲撃と強制的な収容によって河川敷から一掃されたことを回想する。襲撃の最中に意識を失い、柳たちの消息を見失った木下は、彼らの最後の場面をフィクションとして創造して作品の幕は閉じる。

6.『野良ビトたちの燃え上がる肖像』と「人新世」における「人間」

ここまで人間―動物、そして資源―ゴミの境界の揺らぎを軸に作品を辿ってきたが、さらに人新世（アンスロポセン）の課題を導入することで、この小説が示す問題意識の重要性を明らかにしておきたい。*The Anthropocene: Key Issues for Humanities*（『人新世―人文学における核心的課題』、2020年）において人新世についての論点整理を行ったエヴァ・ホルンはチャクラバーティの論を引きつつ、人新世における「人間」には二つかそれ以上の異なる概念が含まれていることを指摘している。

> 一方において「ホモ」としての人間は、文化的で社会的な存在であり、ジェンダー、文化、人種、経済的環境によって差異化されている。他方で人間は異なる生物学的な種の中のひとつである「アンスロポス」のようであり、しかしまた抽象的で地球物理学的な力のようでもあるのだ。（146）[13]

人新世（アンスロポセン）は、人間を人文学の従来の領域である文化と社会だけではなく、生物学や地学の領域からも考えることを要求している。木村の『野良ビトたちの燃え上がる肖像』において、地域住民がタワーマンションやゲーテッドタウンの人びとの論理に突き動かされてホームレスを「野良ビト」として差別化する行為は、文化・社会的な差異化によって動物とは異

13
翻訳は筆者による。

なる「ホモ」としての人間存在を生み出す。その一方、柳や木下らは、文化・社会的差異化よりも動物との交感を通して自らを認識せんとする「アンスロポス」としての人間存在を重視し、その認識こそが現在の世界観を変えることにつながると感じている。例えば木下は「猫が喉をふるふる震わす音こそ、世界を鎮静させる音ですから」(61)と語るが、この「鎮静」にはマスコミを通して「東京世界スポーツ祭典」というお祭り騒ぎを演出し「経済成長」を生み出そうとする世の中への批判が込められている。動物との共感・交感は、経済・文化・社会において人間を差異化する「ホモ」の論理に対抗する「アンスロポス」、あるいはステーシー・アライモが主張するようなTrans-Corporeal(超身体的)な共生の思想の表れである。

「ゴミ」はこうした差異化と共生の論理の境界線上に存在する。差異化の論理を強調する者にとって、ゴミを拾って生活する人間は、カラスや野良ネコと同じ行為をする者であり、したがってホームレスは自分たちよりも動物に近い存在だと考えられる。ゴミを捨てることと拾うことが人間と動物の境界となっている。しかし、なぜゴミは拾われるのだろうか。無用の廃棄物というのは一体誰にとってなのか。ある物がゴミであるか否かは恣意的な判断であり、また捨てたという行為の結果でもある。それはゴミを拾い、再び使用することによってゴミの背後にある恣意が疑問に付され別の可能性が示されることによって明らかになる。物をゴミとして廃棄することは、物を視界から遠ざけ関係を切断することであるが、ゴミを拾い再利用することで物と人は再びつながり、その関係性が回復される。『野良ビトたちの燃え上がる肖像』において、ホームレスの人びとによる物の再利用がある象徴的な意味を持っていることは確かである。会社組織の合理化によって無用とされた人びとと、経済的な勝者によって捨てられた物(ゴミ)は、経済的論理という平面上において同じ位相にあると考えられる。そして、ゴミを再利用するということはホームレスの人びとが社会的に生きるということと範列的な関係にある。

その一方で、小説の登場人物たちが「資源ゴミ」である空き缶を回収していることにも注意が必要である。一般の地域住民にとってゴミである空き缶は、環境的には再利用できる資源である。この再利用可能な資源は、行政によって回収されるが、柳や木下は、それをいわば横取りし、缶を潰すという手間を加えてお金に変える。だがゲーテッドタウンに代表される新興の住宅地は、その生活圏に外部の人間が侵入することを拒絶し、ゴミにも手を触れることが出来ないようになっているため柳たちにとっては「不毛の地」となる。

環境的に優しい政策であるゴミの再利用がホームレスの人びとを排除するのはなぜなのだろうか。人新世(アンスロポセン)の思想の中で浮かび上がってきた環境主義の在り方のひとつにエコモダニズムがある。この考え方は、

環境問題に対処する方法として近代化の延長、つまり科学によるより効率的で環境に優しい経済発展を追求するものである[14]。この考え方はクルッツェンなど人新世（アンスロポセン）の初期の提唱者である科学者たちが抱いていたものに近い。一般に行政や企業が主導して行う環境政策はエコモダニズムであるが、問題は環境が人類の課題として共有され積極的な解決が追求される傍ら、南北問題や国内の格差は見過ごされ、場合によっては助長されることである。本来環境保護と経済発展は相反する行為であるが、それを科学によって解決するという考え方は、近代社会が生んだ問題をそのまま温存してしまう可能性がある。

それに対し、人文学的な人新世（アンスロポセン）の思想としてエコ・ポストヒューマニズムがある。レイ・ブレイドッティ、ダナ・ハラウェイ、ジェーン・ベネット、アナ・ツィン、ティモシー・モートン、ブルーノ・ラトゥール等を含むこの思想は、筆者の理解では20世紀のポスト構造主義が21世紀最大の課題である環境問題（非人間）に取り組む過程で初期の環境思想を取り入れ変化したものである[15]。エコ・ポストヒューマニズムの特徴は文化と自然、人間と非人間といった二項対立的な境界を疑問視し、個々の物質や存在のネットワークを考えることである。この立場は、人間が常に地球の重力や植物の光合成、化石燃料の燃焼といった様々な力や物質と相互行為的な関係にあると考え、「アンスロポス」の立場から従来の文化・社会的なカテゴリーを拡張し、人為と自然が対立する関係ではないことを主張する[16]。筆者にとって重要なことは、人新世という考え方がまさに人文学と自然科学、あるいはローカルとグローバルの相互不可分性を表していることであり、そのことによって21世紀の思想となっている事実である[17]。

『野良ビトたちの燃え上がる肖像』においてリサイクルを推進する政策とインフラがホームレスの人びとの行き場を失わせてしまっていることは、一面では正しいことであるはずの環境運動、そして人新世（アンスロポセン）が提唱する「人類」というカテゴリーにとってのひとつの、しかし重大な盲点である。リサイクル活動は決して現在の行政が行っている形である必要はない。本稿で取り上げた作品を例にすると、ルース・オゼキの『ある時の物語』の舞台であるカナダのコルテス島では、リサイクルの場が島の住民にとって中心的な場所となっているだけではなく、彼らは他の人にとって不用となった物を自由に物色し再利用している。リサイクルは島の人びとが物々交換を行う交流の場なのであり、用・無用の境界は常に変化をする一時的なものに過ぎない。『ある時の物語』において、住人たちが読まなくなった本を集めたブノアの個人図書館のコレクションが島の公的な図書館よりも立派である（下巻11）とされていることは、消費社会の「ゴミ」の位相を反転させる行為がひとつの「文化」となり得ることを示している。環境人文学、特に人新世の

14
エコモダニストにとっては環境主義者こそが最大の敵となる。Gareth Austin ed. *Economic Development and Environmental History in the Anthropocene: Perspectives on Asia and Africa* (London: Bloomsbury, 2017), p. 307; John Barry, *The Politics of Actually Existing Unsustainability: Human Flourishing in a Climate-changed Carbon Constrained World* (London and New York: Oxford University Press, 2012), p. 23. 藤原辰史が批判しているエコロジーとは主にこの考え方を指している。

15
無論この見方が全てではないが、ポストヒューマニズムとポスト構造主義の親和性は否定できないであろう。

16
マルムをはじめとするエコ・ポストヒューマニズムに批判的な論者たちはこれを「折衷主義」（hybridism）と呼び批判している。この思想的な対立については本稿のテーマから逸れるため別の場所で論じることとしたい。

17
科学による問題解決ではなく、科学とともにある（あるいは離接的な関係にある）人文学的思考の展開のひとつの結節点として「人新世」を考えるとより創造的になるのではないだろうか。

思想から見れば、木村の作品においてオリンピックを目前に控えた日本がリサイクル推進と同時にゴミの管理を強化し、用・無用の境界線を強く引き直すさまは、エコモダニズムの負の側面が何であるかを描き出していると言えそうである。

しかし、『野良ビトたちの燃え上がる肖像』がエコ・ポストヒューマニズムの概念に当てはまるというわけではない。語り手の木下は、その創作の最後において、柳が暴徒から逃れるために仲間をリアカーに乗せて走り出す場面を描く。絶体絶命の窮地に追い詰められた柳は、姿を消した飼い猫のムスビが下流に向かったことを唯一の望みとしてリアカーを下流に向け、さらに「そうだ、ムスビだったらそうするはずだ」と思い、とっさに「同じ獣としての吠え声」を発する(168)。作者である木村が動物と人間の一体化を描くのはこれが初めてではない。本稿でも触れた「聖地Cs」においては、主人公の西野が政治的パフォーマンスとして福島を視察する政治家に対し「見てください。よく見てください。これは、いのちの証しです。いのちの証しです」と口走りながら放射性物質にまみれた牛たちの「糞泥」を政治家の目の前に突きつけ、さらに牛に同化して「あの鳴き声」を「息のつづくかぎり叫」んでいる(83)。

先に挙げた分類を敷衍すれば、木村は「ホモ」と「アンスロポス」の二つの人間存在において、「アンスロポス」に同一化し、超身体性を表現しているのだ。この結末については様々な解釈や判断が可能である。この場面を一種のカタルシスと捉え、社会とホームレス、人間と動物の緊張関係を芸術的に昇華させてしまったことを問題視することもできる。また、主人公が動物と一体化することで、その立場を鮮明にし、政治性を表現したと評価することもできよう。

本稿のテーマである「ゴミ」の視点から『野良ビトたちの燃え上がる肖像』を考えると、柳がムスビと一体化し姿を消してしまうことで、ゴミに象徴される用・無用の境界線は固定されたまま終わってしまった観がある。この小説は近未来を描いているが、柳とムスビが消えてしまうというクライマックスにより境界線そのものに生じる揺らぎや変化を描くことは放棄されてしまった。現代の環境問題の一面が二酸化炭素、プラスチック、放射性廃棄物を含む「ゴミ」の問題であると考えると、このテーマは未だに大きな可能性を残したままである。木村の小説はネオリベラル化する社会がエコモダニズムの論理のもとに管理を強化し資源とゴミの境界を明確にそして恣意的に分断することで、その境界の曖昧さを生存圏としていた人たちと地域との関係を断ち切り、その犠牲となった者たちの姿を描いたと要約できるだろう。エコモダニズムの論理に対する戦いのヒロイズムを描くことによって、皮肉にも人間と動物が一体化し「野良ビト」となる。しかしそれは彼らを排除する側の視線でもある。人新世の課題はおそらく、地球の有限性が明らかに

なった現代において、人間中心的な資源とゴミ（利用と廃棄）の分類がもたらす環境的な弊害を認識し、そもそも人間中心的という時の「人間」とは誰なのかを考え、廃棄ではなくネットワーク的な循環の関係がもたらす価値を描くことにあると筆者は考えている。

作中で木村は、猫を矢で射て弄んでいた少年が柳に対し「結果をだせ、結果こそすべてだ。結果、結果、結果をださないやつに、ご飯を食べる資格はないっ。家のベッドで寝る資格もないっ。」と叫ぶ姿を描き、柳にこの少年の背後にある社会の問題を想起させている（113）。さらに柳は少年の姿から離婚した妻との間にもうけた息子を思い出している。柳は「家事も育児もせずに」パチンコに明け暮れる妻を殴ったせいで離婚し、それ以来息子にも会っていないことを明かす（114）。自分を「人間じゃない。野良猫と同じ」（112）と嘲る少年に対峙した柳は、置き去りにした息子がこの社会でどのように成長したのだろうかと思わずにはいられない。仕事で家を空けることが多く、家事や育児をしない妻を殴った柳にもまた、結果を出さない人間に生きる資格はないという感覚があったのではないだろうか。用と無用、資源とゴミを分ける差異化と暴力がふとしたことをきっかけに反転し、この小説の登場人物たちにとっての負の連鎖となっているようだ。木村の小説には、収入のほとんどを寄付につぎ込んだ木下をはじめ、様々なホームレス支援者たちが描かれ、彼らによって第三者的な情勢分析がもたらされている。しかし、そのような支援のネットワークは、用と無用の分断と暴力の前ではあまりに無力であり、柳や猫たちは河川敷から一掃されてしまう。ここに希望を見いだすことは難しい。

人新世の思想がもたらす新しい視点は、人間がホモかアンスロポスかではなく、ホモでもアンスロポスでもあることである。特に人間が文化や社会だけではなく生物（動物、微生物、ウィルス、遺伝子）や地球（二酸化炭素、放射性物質）という視点からも認識されることによって、例えば経済成長という前者にとっての利益が後者にとっては害であることが明らかになる。また、経済や社会が人間個人の利益に合わせて5年や長くても10年単位で計画されるのに対し、生態圏や地球環境は人間個人の一生を大きく超えた時間の幅で考えられなければならない。こうした認識が、従来のリアリズム小説を越えた、敢えて言えばSF的な時間軸を要求している。この観点からすると、木村が2年、4年先の世界を描いた近未来小説は、経済成長の論理の時間軸に合わせた想像であったのかもしれない[18]。現実の東京オリンピックはCOVID-19の世界的流行によって延期となり、次年度の開催も予断を許さない状況である[19]。私たちの社会が非人間の存在によって根底から変えられてしまうことを知ったのはもちろん初めてのことではない。東日本大震災が社会に大きな変化と教訓をもたらしたはずだ。その東日本大震災からの復興を

18
無論、近未来が現在の現実に対する感覚を維持したまま想定できる未来であり、リアリズムの枠内で未来を描く手法であることの利点も見逃すことはできない。

19
2020年6月1日時点

中心的なテーマに掲げて計画された東京オリンピックがCOVID-19によって延期されたことは、また改めて非人間の存在の大きさを人間社会に知らしめる出来事であった。

『野良ビトたちの燃え上がる肖像』において、震災からの復興のためにオリンピックを開催するというエコモダニズム的な論理は、ゴミの管理や街の美化運動の強化によるマージナルな空間の閉鎖につながり、それは柳たちホームレスをゴミに表象して隔離し撲滅する行為となった。一方COVID-19が改めて教えてくれるのは、人間が既に常に不可解な非人間たちと共存していること、そして誰もが隔離の対象になり得ることである。人新世の概念はこれまで主にそのエコモダニズム的側面が批判されてきた。木村の小説が対抗し批判するのもそのような論理である。一方で今求められるのは、ゴミやウィルスや科学技術を人間存在に織り込んだポストヒューマンの位相ではないだろうか。恐るべき非人間たちとの共生は、人間中心的な「ホモ」とも一体感や癒しを見出す「アンスロポス」とも異なる位相に見いだされる。共生とは差別化でもなければ一体化でもなく、おそらくは離接的な関係の維持なのである。

本稿は科研費課題（課題番号18K00511）の一部である。

また本稿執筆のきっかけとなったTCS国際シンポジウム「文化としてのゴミ／Waste as Culture, the Culture of Waste」では名古屋大学超域文化センターより助成を受けた。深謝。

参考文献

【英語】

Alaimo, Stacy. *Exposed: Environmental Politics and Pleasures in Posthuman Times*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 2016.

Austin, Gareth, ed. *Economic Development and Environmental History in the Anthropocene: Perspectives on Asia and Africa*. London: Bloomsbury, 2017.

Barry, John. *The Politics of Actually Existing Unsustainability: Human Flourishing in a Climate-changed Carbon Constrained World*. London and New York: Oxford University Press, 2012.

Bauman, Zygmunt. *Wasted Lives: Modernity and its Outcasts*. Cambridge, UK: Polity, 2004.

Chakrabarty, Dipesh. "The Climate of History: Four Theses." *Critical Inquiry*. Vol. 35, No. 2 (Winter 2009): pp. 197–222.

Colebrook, Claire. "The Twilight of the Anthropocene: Sustaining Literature." in *Literature and Sustainability: Concept, Text, and Culture*, edited by Adeline Johns-Putra, John Parham, and Louise Squire. Manchester: Manchester University Press, 2017, pp. 115–136.

Crutzen, P.J. and Stoemer, E.F. "The 'Anthropocene.'" IGBP Global Change Newsletter 41 (2000): 17–18.

Haraway, Donna. *Staying with the Trouble: Making Kin in the Chthulucene*. Durham, NC: Duke University Press, 2016.

Lewis, L. Simon and Maslin, A. Mark. *The Human Planet: How We Created the Anthropocene*. London: Pelican Books, 2018.

Malm, Andreas. *The Progress of This Storm: Nature and Society in a Warming World*. London: Verso, 2018.

Moore, W. Jason, ed. *Anthropocene or Capitalocene? Nature, History, and the Crisis of Capitalism*. Oakland, CA: PM Press, 2016.

Morton, Timothy. *Hyperobjects: Philosophy and Ecology after the End of the World*. Minneapolis: Minnesota University Press, 2013.

Ozeki, Ruth. *A Tale for the Time Being*. Edinburgh: Canongate Books, 2013.

Royal Society. "Geoengineering the Climate Science, Governance and Uncertainty." 2009. https://royalsociety.org/topics-policy/publications/2009/geoengineering-climate/

Thill, Brian. *Waste*. London: Bloomsbury, 2015.

Viney, William. *Waste: A Philosophy of Things*. London: Bloomsbury, 2014.

【日本語】

恩田陸『錆びた太陽』朝日新聞出版、2017年。

桐野夏生『バラカ』集英社、2016年。

玄侑宗久「光の山」『光の山』新潮社、2013年、147–167頁。

木村友佑『聖地Cs』新潮社、2014年。
「埋み火」『イサの氾濫』未来社、2016年、97–150頁。
『野良ビトたちの燃え上がる肖像』新潮社、2016年。
『幼な子の聖戦』集英社、2020年。

佐伯一麦『還れぬ家』新潮社、2013年。

佐藤仁『持たざる国の資源論』東京大学出版会、2011年。

瀬尾夏美『あわいゆくころ―陸前高田、震災後を生きる』晶文社、2019年。

ダグラス、メアリ『汚穢と禁忌』思潮社、1995年。

天童荒太『ムーンライト・ダイバー』文藝春秋、2016年。

芳賀浩一『ポスト3.11小説論―遅い暴力に抗する人新世の思想』水声社、2018年。

葉上太郎『瓦礫にあらず―石巻「津波拾得物」の物語』岩波書店、2013年。

藤原辰史『分解の哲学―腐敗と発酵をめぐる思考』青土社、2019年。

辺見庸『眼の海』毎日新聞社、2011年。

北条裕子『美しい顔』講談社、2019年。

穂高健一『小説3.11　海は憎まず』日新報道、2013年。

丸山祐介『ガレキ』ワニブックス、2012年。

真山仁『そして、星の輝く夜がくる』講談社、2014年。

リンチ、ケヴィン『廃棄の文化誌―ゴミと資源の間』有岡孝、駒川義隆訳。工作舎、1994年初版、2008年新装版。

ルース、オゼキ『あるときの物語　上・下』田中文訳、早川書房、2014年。